

【旧約聖書日課】ヨシュア記 1章1～9節

¹主の僕モーセの死後、主はモーセの従者、ヌンの子ヨシュアに言われた。
²「わたしの僕モーセは死んだ。今、あなたはこの民すべてと共に立ってヨルダン川を渡り、わたしがイスラエルの人々に与えようとしている土地に行きなさい。³モーセに告げたとおり、わたしはあなたたちの足の裏が踏む所をすべてあなたたちに与える。⁴荒れ野からレバノン山を越え、あの大河ユーフラテスまで、ヘト人の全地を含み、太陽の沈む大海に至るまでが、あなたたちの領土となる。⁵一生の間、あなたの行く手に立ちはだかる者はないであろう。わたしはモーセと共にいたように、あなたと共にいる。あなたを見放すことも、見捨てることもない。

⁶強く、雄々しくあれ。あなたは、わたしが先祖たちに与えると誓った土地を、この民に継がせる者である。⁷ただ、強く、大いに雄々しくあって、わたしの僕モーセが命じた律法をすべて忠実に守り、右にも左にもそれではならない。そうすれば、あなたはどこに行っても成功する。⁸この律法の書をあなたの口から離すことなく、昼も夜も口ずさみ、そこに書かれていることをすべて忠実に守りなさい。そうすれば、あなたは、その行く先々で栄え、成功する。⁹わたしは、強く雄々しくあれと命じたではないか。うろたえてはならない。おののいてはならない。あなたがどこに行ってもあなたの神、主は共にいる。」

【使徒書日課】使徒言行録 2章1～11節

¹五旬祭の日が来て、一同が一つになって集まっていると、²突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。³そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。⁴すると、一同は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話した。

5さて、エルサレムには天下のあらゆる国から帰って来た、信心深いユダヤ人が住んでいたが、6この物音に大勢の人が集まって来た。そして、だれもかれも、自分の故郷の言葉が話されているのを聞いて、あっけにとられてしまった。7人々は驚き怪しんで言った。「話をしているこの人たちは、皆ガリラヤの人ではないか。8どうしてわたしたちは、めいめいが生まれた故郷の言葉を聞くのだろうか。9わたしたちの中には、パルティア、メディア、エラムからの者がおり、また、メソポタミア、ユダヤ、カパドキア、ポントス、アジア、10フリギア、パンフィリア、エジプト、キレネに接するリビア地方などに住む者もいる。また、ローマから来て滞在中の者、11ユダヤ人もいれば、ユダヤ教への改宗者もあり、クレタ、アラビアから来た者もいるのに、彼らがわたしたちの言葉で神の偉大な業を語っているのを聞こうとは。」

聖霊降臨を祝おう！【こども説教のために】

ペンテコステおめでとうございます。聖霊降臨おめでとうございます。弟子たちの教会に聖霊が与えられました。わたしたち一人ひとりに、ご復活の主のお約束くださった聖霊が与えられました。聖霊は、皆さん一人ひとりに与えられたのです。今日は、皆さんの祝いの日です。

最初のペンテコステの日、弟子たちは一つところに集まっていました。120人程の集まりだったようです。かつて主イエスの教えを受け、従っていた弟子たちです。十字架で死んで葬られた主イエスが今も自分たちの集まりの中に現れてくださることを、経験していました。彼らは、エルサレムの町にある仲間の家に集まっていたのでしょうか。五旬祭の祝いの日を迎えて、町には世界中から集まって来たユダヤ人があふれていました。町中が祭気分であふれていたことでしょう。けれども、彼らはその家に集まって一つになっていました。祭のときこそ一つになって集まって過ごすことを、主イエスに教えられていたのかもしれませんが。

そこに、あの出来事は起こったのです。突然、激しい風が吹いてくるような音が天から聞こえ…家中に響きました。炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人ひとりの上にとどまりました。そこにいた皆が、聖霊に満たされたのです。「神は、あなたにも聖霊を与えてくださった」と、彼らは互いに告げ合ったのでしょうか。そう告げ合う弟子たちの集まりが、教会になりました。

神から聖霊を与えられた皆さん、おめでとうございます。皆さんは、聖霊を与えられて「神の子」とされた一人ひとりなのです。

「神の御業の物語」を聞かせたい！

「教会」は、あのペンテコステの日から始まりました。

もちろん、弟子たちの集まりは、それよりも前からあったのです。遡れば、主イエスが弟子たちを従わせられたときから、彼らは一つの集団を作ってきていました。主イエスと共にガリラヤで過ごした三年ほどの期間が無ければ、あの聖霊降臨の日に弟子たちが一つになって集まっていることもなかったでしょう。「教会」は、主イエスが弟子たちを従わせられたときから始まった、と言ってもよいのです。

けれども、わたしたちが知っている「教会」は、やはり、あの弟子たちが最初に経験した聖霊降臨の日、ペンテコステの日から始まった、と言うべきです。その日から、彼らが語り始めたからです。

その日、弟子たちは、「神の御業」を語り始めました。霊が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話したのです。聞いている者が、自分の故郷の言葉で話されていると知って、耳を傾けずにいられなくなるような仕方で、彼らは「神の御業」を語り始めたのです。

わたしたちが、その弟子たちから二千年のときを越えて受け継いだ「教会」は、何よりも「神の御業」を語る者たちの集まりです。礼拝で、わたしたちは、「神の御業」を見るように導かれます。礼拝そのものが「神の御業」であると、教えられてきました。それぞれ違ったところで日々の生活を送る一人ひとりが、定められたときに一つところに集められ、神の御言葉を聞き、祈りと賛美をささげる礼拝にあずかるようにされる。礼拝ばかりではありません。「教会」の営みのすべてにおいて、同様のことが言えるでしょう。そのこと自体が、「神の御業」そのものに他ならない。「教会」は、自らの唇で語ることによってのみならず、自らの存在させられていることそのものによって、「神の御業」を語っています。

それは、ペンテコステの日弟子たちが「神の御業」を語り始めたところから始まりました。その日、「神の御業」を語る「教会」が始まったのです。

弟子たちは、「神の御業」を語り始めました。それは、彼らがすでに「聖書」を通して聞いていた、先祖たちの間で起こされた「神の御業」を語るころから始まったのかもしれませんが。もちろん、それでお終いではありませんでした。彼らは、「聖書」の先の時代に起こったこと、主イエスという方を通して起こったことを、「神の御業」として語りました。主イエスのことだけでなく、主イエスに従った自分たちのことも、「神の御業」として語りました。最初の弟子たち、「教会」が「使徒たち」と呼んだ弟子たちの語った、新しい「神の御業」の出来事は、わたしたちが「新約聖書」と呼ぶ書物にまとめられたのです。

それは「あなたの物語」

「教会」の「聖書」は、主イエスや弟子たちがユダヤ人として受け継いだ「(旧約) 聖書」に、この「新約聖書」を加えて、できあがりました。「教会」の歴史の最初の数世紀で、共通する「聖書」の枠組みができあがったのです。

そこに収められたのは、「使徒たち」の語った「神の御業」の出来事まででした。それ以後の時代の「教会」で新たに語られた「神の御業」は、もはや「聖書」に付け加えられることはされなくなりました。けれども、それは、「教会」が語る「神の御業」の出来事を、「使徒たち」の時代までに限定する、ということではありません。

教会では、確かに完結した「聖書」の枠組みを大切にしています。礼拝では、基本的に「聖書」が朗読されます。教会によっては、讃美の歌の言葉も、「聖書」の中に記された言葉（「詩編」など）に限る、という場合もあります。また、教会が平日に開く集會も、「聖書」そのものを読み、学ぶ集まりが、中核に置かれています。「聖書」の枠組みを維持していることが、教派を越えて互いに「キリスト教会」であることの一つのしるしにもなっています。

その割には、「聖書」を読むことが苦手な信者が多いのは、なぜでしょうか。「遠い異国の古い時代の物語を読んでも、理解が難しい」と、おっしゃる方が、少なくありません。「良い手引きが必要だ」と、おっしゃいます。「聖書を読むのは、専門家にまかせる」と、堂々とおっしゃる方もあります。確かに、「聖書」に書かれているのは、紀元1世紀までのオリエント世界の片隅で起こった出来事がほとんどです。その、世界史の中でも非常に限られたところについて背景を知っていなければ理解できないとしたら、何と難解な書物かと思えます。単純に「書かれているとおりに理解する」か、さもなくば、「すべて比喩の物語として理解する」か、割り切らなければ、限られた時間の中で皆さんがこの書物をご自分の物にするのは、難しいかもしれません。

けれども、皆さんには知っていただきたいのです。「使徒たち」と呼ばれた弟子たちがペンテコステの日に始めたのは、「神の御業」が何よりも、「あなたの物語」であるということを伝えることであつた、ということです。

彼らは、「ほかの国々の言葉で話した」と言われます。「**人々は自分の故郷の言葉で話されているのを聞い**」たと言われています。それは、もはやAIで可能な自動翻訳のような現象ではないのです。彼らは、「聞く者の語ることのできる言葉で話した」のです。「神の御業」が、いにしへの時代の先祖たちの身に起こったように、今、この時代にも起こり、あなたの身にも起こっている。あなた自身が、そのことを語るができる。そう、彼らは告げたのです。教会は、そう、皆さんに告げているのです。「神の御業」は、今、あなたの身に起こっていることだ、と。